
イナズマイレブン 呪いの魔術師

ユズボン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イナズマイレブン 呪いの魔術師

【Nコード】

N2011J

【作者名】

ユズポン

【あらすじ】

グランがヤバいぞ第2弾！！好きな奴をいじめなくなる小学生男子的思考の持ち主、ユズポンです！！

ある日、エイリアを倒した円堂達の前に、壊れた新校舎と、新たな敵が現れる！！

その時現れた強い助っ人！！しかし奴らの力は圧倒的で？？！！おまけに自分達に負けると呪いが降りかかると言って！？

「1」 新たな敵！その名もストーム！！（前書き）

悪魔でこれは予想です！！アニメ、漫画のイナズマイレブンとは、全く関係ありません！！

「1」 新たなる敵！その名もストーム！！

円堂守率いるイナズマイレブンを乗せたキャラバンは、富士山から東京の雷門中に向かっていているところだった。

「帰ったら、風丸と栗松に会いに行こう」

落ち着き払った声で、鬼道が言った。

「そうだな。」

円堂も頷く。風丸一郎太と栗松鉄平は、福岡でのジェネシス戦で限界を知り、チームを抜けたのだ。

???二人に対して、同情する気ではない。

自分の限界を知る事は、辛く、悲しい事。

だからこそ、円堂はここまで何回も限界を破って来た。

帝国との練習試合の時や、世宇子との決戦だって。

???限界は、破れるんだって。

二人に伝えたいんだ。

「でさ、これからは皆どうすんだよ？」

ふと、塔子が言った。

「これからって？」

「だから、雷門中に帰った後だよ。エイリアは倒した訳だし???」

「それもそうねえ??」

「ウチは決まってるで!!」

そんな中、軽快な大阪弁で大声で声をあげたのは、リカだ。

「ダーリンとお好み焼き屋作って、幸せな家庭を築くんや」

リカは相変わらずのようだ。

円堂は、隣の立向居に聞く。

「立向居は、どうするんだ？」

「俺ですか？俺は、陽花戸中に帰ろうと思っています」

「陽花戸中に？」

「俺もそうすっかなー」

次に、津波が口を開く。

「そろそろ海が恋しくなってきた頃だしよ」

「ボクも、白恋中で皆が待ってるから。」

「なあ、さ。」

明るい雰囲気の流れる中、木暮が言った。

「?????」

「俺、このチームに入って良かったと思う」

「木暮君????」

「俺、人が信じられなくなってた。だってホラ、俺、母ちゃんの事
????あつただろ?」

「????」

皆、ハツとする。木暮は昔、実の母親に駅のホームに置き去りにされたのだ。

「俺、このチームが大好きだ!!ここに入って、わかった。???
人は、信じなきゃダメだって!!音無春奈や、皆のおかげ。ありが
とな!!」

木暮は手を差し出し、春奈に握手を求める。春奈も、手を出し、手
は重なる。

「????????うわあっ!!」

ふと、木暮が大声をあげた。手の中から、玩具のカエルが飛び出す。
「えへへー、私もやってみたかったんだー うっしっしっ」

春奈が悪戯っぽく笑う。

「信じた俺が馬鹿だったー!!」

「わーい!!仕返し成功ー」

この二人、意外にお似合いなのではないだろうか。

雷門中...

「あれ?暗いな??」

雷門中に着いたものの、霧が深く、人の声など聞こえない。

「おかしいな????今日は平日なはずだし、休みでもない????それに今は昼休みの時間帯なんだが????」

鬼道が言う。

すると、ゆつくりと霧が晴れ???

「何????!?!?」

なんと???

「雷門中が???壊れている!?!」

「バカな!?!?エイリアは???」

すると、声が響いた。

「倒した筈???私をお忘れですか?皆様???」

その心底楽しそうな声は、徐々に円堂達に近付いていた。

「お前はつ???」

「研崎竜一!?!?!?」

そう。それは、吉良星次郎の元部下、研崎竜一だった。

「お前、なんでここに?!?!」

響木が驚きを隠せない声音で言った。

「フッフ???まだ引くワケにはいきませんか????なんとって皆様には「新たな戦い」が待っていますからね????」

研崎竜一は、可笑しそうにクククと笑う。

「新たなる???」

「戦いだと!?!?!?」

そんな事あるはずない????!?!

「さあお前達、出てきなさい」

すると操られたように霧が晴れ、11人の人影が姿を表わした。

「詩音、雷門中の皆様に挨拶だ」

そして一つの人影が歩み出た。

「こんにちは、雷門の皆さん。僕はストームのキャプテン、相川詩音です。今から皆さんには、我々と試合をしてもらいます。

我々に勝てば、我々はこの場を退きます。

皆さんが負けたら??? 恐るべき呪いが降りかかるでしょう」

「呪い??? だと!？」

「嘘だ!! そんなもの存在しない!!」

円堂は叫ぶ。

「フツ??? 皆さんがそう思いなら、その一人や二人、実験台にしましうか？」

「???!! やめる!!」

「フフ??? なら、我々と試合を???」

「??? 分かった。試合を - - - - -」

円堂が言いかけた時、ふと後ろから声がかかった。

「ちよつと待った!!」

聞き覚えのあるその声に、皆が降りかえった。

「1」 新たなる敵！その名もストーム！！（後書き）

皆さん、この声の主は大体予想がつくでしょう？（分かるか！！）
ではっ！！

「2」 圧倒的な力

声が掛かった方を振り返ると、そこには???

「ヒロト!?それに、瞳子監督!?!」

グランと瞳子が居た。その後ろには、どういう事がジェネシスが全員いた。

「なんで、ヒロト達が居るんだよ!?!」

「もう一度雷門にこないかって言われて来てみたんだけど???!」

瞳子の声を遮るように、グランが大声をあげる。

「その試合、我等ジェネシスが受けて立つ!?!」

「研崎様???!」

詩音は返事を求めて研崎を見る。

研崎は、不適な笑みを浮かべて言った。

「フフフ???!いいでしょう。損はないはずです。貴方達には、雷門への見せしめとなってもらいましょう。では詩音、試合の準備をしないさい」

「はい」

詩音は短く返事し、準備のためパタパタと去って行く。

「ヒロト、大丈夫なのか?」

「大丈夫さ円堂君。これでも俺達は、エイリア学園最強のザ?ジェネシスだ!?!」

「そつか。そうだよな???!」

円堂がそう言い微笑した時、ふと後ろから声がした。

「ヒロト???!」

女の子の声だった。しかしそれは瞳子でも、秋達でもウルビダ達でもない。

「岡本!?!」

それは、円堂と同じクラスの岡本美咲だった。避難していたのか、彼女の制服は少し汚れていた。

「美咲????か?」

グランも驚いた顔で彼女を見る。

「ヒロト????だよな?お日様園以来だね????」

美しいと書くだけあって、彼女は可愛い。そんな美咲はヒロトに掛けより、喜びの顔でヒロトを見た。

「お日様園つて????まさか岡本もエイリアか!？」

「違う???美咲は小5の頃引き取られて、その後俺達はエイリアになったんだ????」

「その時???私は告白したの。そして私はヒロトの彼女になれた???でもすぐに引き取られて???ねえヒロト、私、あの頃と気持ち変わってない。ヒロトはどうかかな????」

ヒロトは美咲を見て、そして言った。

「俺も変わってないよ。また、付き合おう」

温かいムードの中で、秋と夏美はうつとりしたような顔をしている。そんなムードを壊したのは、あるう事が研崎だった。

「試合の準備が出来ました。ジェネシスは位置に着いて下さい」
そんな一言。

「さて、奴等の力、お手並み拝見だな????」

鬼道が言った。

「ヒロト????頑張つて????」

美咲は、真剣な表情でそう言った。

キックオフ。ウルビダからグランへとパスが回る。

するとその瞬間????

ヒュンツ????

風の音が聞こえたかと思うと、いつの間にかボールは詩音の足元にあった。

「何!？」

「早いっ!」

彼等の速さはエイリア学園をも凌駕し、あるう事が前半数分だけで

10点も入れられてしまった。

詩音が暗い目をして言った。

「この程度か???残念だ。お前達をこれから消去する」
デリート

消去???すなわち、二度とサッカーが出来ない様にする事。

ガッツ

「つつ!!」

詩音達は、風丸の時のジェネシスの様に、オフサイドの行為(?)
でグラン達を攻撃した。

「なつつ!!あれはオフサイドだろ!!」

「いや???ギリギリだ。奴等???計算してやっているのか??
??」

そんな会話の中、攻撃は続く。

「くっ???」

グラン達はもうボロボロで、全員が深い傷を負っていた。

「後半があなた達の墓場だ」

前半終了のホイッスルが鳴り、詩音はそう言って去っていった。

「ヒロト!!みんな!!」

円堂が掛けよる。

「円???堂君???ごめん???全然歯が立たなかった???」

「もう無理するな!!」

「いや???まだ???あいつらにせめても一点??

?入れてやらないと???」

「私達も???思いは同じだ???」

皆の目は、決意の目だった。

ピー!!

後半戦開始。ボールがグランに回り、シュートを????

「スーパー???ノヴァ!!」

しかし。

「たつき樹。」

詩音はG Kの樹に言う。

バシッ???

「何!？」

「くっ??？」

そしてジエネシス皆倒れた。

審判が試合続行不可能とし、声をあげようとしたその時???

「????まだだ??？」

「!？」

グランだけがユラリと立ち上がった。そしてその手袋がはめられた指は、胸のボタンへと伸びる。

「まさか????ここでもリミッター解除をする気か!？そんな事をしたらあいつはもう??？」

「????!？やめる!!ヒロト!!」

円堂が叫ぶが、グランの指は止まらない。

「ごめん円堂君????奴等を止めるには、もうこつするしかないんだ????」

カチリ。

「?????!」

「2」 圧倒的な力（後書き）

やばい
いい
いい
いい
いい
いい
いい
いい
！！
！！
！！
！！
！！

なんか執筆してたら文字が打てなくなつたああああああ！！ちなみに私はD S iで投稿しているんですが、途中でとまっちゃうんです。D S自体は動いてるのに、

文字だってオーバーしてないのに文字が打てなくなるんです！！何か知ってる方はコメントで教えて下さい！！
ではっ！！

「3」 消去の本当の意味（前書き）

いやー、やばいっすねー。

「3」 消去の本当の意味

グランは胸のボタンを押した。

「あっ??？」

そしてグランは最後の力を振り絞り、一人で出来るあの技を???

「???流星???ブレード!!」

もの凄い威力のシュートがゴールに向かって飛んで行く。

しかしそれもまた。

ガシッ???

樹は片手でセーブした。

「????!!」

力尽きた様に、グランは倒れた。

ピーッ!!

試合終了のホイッスルになる。

「ヒロトオ!!!!!!」

いつの間にかストームと研崎はいなくなっていた。

病院・・・

「瞳子監督、ヒロト達は？」

「ヒロトは???もうサッカーが出来ないかもしれないって???
けれど本人のリハビリ次第だって言ってたわ。」

「そうですか??？」

円堂は、寝ているグランの隣に座る。他のメンバー以上に傷が深い
為、包帯が施されている所が多い。

「研崎?????!許さない????ヒロト達をこんなに傷つけて??
?」

「円堂????」

近くにいた豪炎寺が、悲しい表情をした。
彼にも分かるのだ。

自分の大切な人が傷ついた姿を見て、自分が何もしてやれなかった悔しさが。

「ん?????」

ふと、グランが薄く目を開けた。

「ヒロト!?分かるか!」

「????円、堂君????」

「そうか???ごめん。無理して。」

「ヒロトが謝る事ないさ。また一緒にサッカーしような?」

そんな円堂の一言は、今の心の傷に対する唯一の特効薬なのだ。

「俺、リハビリ頑張るから。今度は、楽しくサッカーしよう。敵ど
うしじゃなく、友達として。ね?」

「????!!ああ!!」

笑顔の円堂に安心を覚えたのか、グランの顔が綻ぶ。
だがしかし。

「?????うつ????」

グランが突然うめきだした。

「ヒロト?!?どうした!」

「????ス?????呪い?????が?????」

「え?」

「円堂!!グランの首を見る!!」

ふと、豪炎寺が血相を変えて言った。

「!」

グランの首筋には、怪しげな動めいている文様が浮かんでいた。

「まさか????これが奴等の言っていた呪いか!」

鬼道も叫ぶ。

「そう言えば聞いた事があるわ???今まででも尾刈戸中の幽谷君
や野生中の水前寺君も、ストームの呪いで苦しんでるって聞いた事
があるわ???」

「なるほど????消去するって言うのは、チームのキャプテンを苦

しませる事によってチームのバランスを崩しサッカーが出来なくなるって事なんだな???

鬼道も頷く。すると病室の扉がバンツと開き、先生を呼びにいった豪炎寺と医師が入って来た。

「????!!すぐにレントゲンを撮りましょう」

「先生、どうですか？」

レントゲンを撮り終わり、人口呼吸器を付けたグランが病室に入っていくのを確認し、円堂は聞いた。先生は暗い表情で答える。

「何らかの理由によって気管が圧迫され、呼吸が困難になっています。しばらくは様子を見ないと、何とも????」

「そんな????」

皆はひしひしと感じていた。

これから戦う事となるだろう敵の強大さを。

「3」 消去の本当の意味（後書き）

グ「つておい、ここで終わらすな!!」

ユ「しょうがないじゃん??? 区切りがいいんだよ、区切りが。」

グ「殺していいかな?（怒）」

円「ヒロトがここまで怒るのまずないから、逃げた方がいいぞ。」

ユ「そう言う訳にも行かないんですよ。なんたって次は決意の話なんですからね」

円「そうなのか?」

ユ「そうそう。2の、豪炎寺が妹に言う奴みたいな。」

グ「俺を無視しないでくれる?」

ユ「いいじゃん。次の話はいつぱいでてくるよ。君」

グ「そう言う問題じゃねえー!!」

ユ「わあっ! グランが怒ったー!!（逃）」

円「はい、続行不可能なんで、そろそろ終わりです。」

ユ「ええええええええええ!!?」

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2011j/>

イナズマイレブン 呪いの魔術師

2010年10月10日00時08分発行